

(別紙様式)

都道府県番号	24
都道府県名	三重県

(/ /)

該当する観点にチェックをすること

・学校の概要

安濃町立東観中学校							
	1年	2年	3年	障害児学級	計	教員数	
学級数	3	3	3	1	10		
生徒数	109	117	108	1	334	17	

・実践研究の概要

1. 主題

豊かな心を持ち、自ら実践する生徒の育成

2. 内容と方法

(1) 実施学年・教科

・ 研究重点教科 全学年数学・英語(指導内容に強い系統性がある、段階を追った指導が必要で生徒の理解度に差がでやすい)
主題を実現するためには他の教科においても研究をすすめていく。

(2) 年次計画

テーマ 豊かな心を持ち、自ら実践する生徒の育成

仮説

生徒に基礎的・基本的な学習内容を確実に取得させる指導を通し、生徒が願いや考えをしっかりと持てるであろうし、いろいろな場や体験・経験の中で学ぶ価値や必然を感じたとき主体的に実践していくであろう。

研究内容・方法

(1) 基礎基本の確実な定着をめざす指導体制の工夫

朝の10分間学習

本年度は、日課変更をし、朝学活の中に基礎学力を鍛える10分間の継続的な学習時間を確保する。教え合う学習集団づくりのひとつの場としてもとらえている。

1・2年では英語・数学(教師作成)、3年では5教科(市販)を実施している。1・2年での実施方法は、授業進度に応じた復習として基礎・基本的な内容を5~6問程度出題している。英語は、単語練習・定着も考えた内容になっている。生活班で机をつけて教え合いができる形態をとっているが、問題を解くために時間がかかり教え合う時間が確保できないことが多いので、1年では、総合的な学習の時間(TCタイム)

に朝の学習の確認テストの時間を位置づけ、その中で、教え合い・高め合う人間関係づくりをすすめると共にTCタイムと教科の関連を図った基礎学力の充実をめざしている。

(2) 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫・改善

選択学習の工夫

2・3年の数学・英語における習熟度別選択授業について、各学年・各教科ともA(基礎)コース、B(定着)コース、C(応用)コース、の習熟度別学級編成をしている。コース選択にあたっては、ガイダンスを行い、また、最初基礎・基本の定着を見るテストを実施してその結果も参考に生徒が自己選択でコースを決定している。決定に迷いのある生徒は教師に相談して決め、途中のコース変更は可能とした。

各学年週2時間を教育課程に位置づけ、数学1時間英語1時間を履修する。学級を2分し、前半グループ(数・英の順)後半グループ(英・数の順)に分かれて通年で学習する。

【数学】〔必修数学の進捗状況に準じた学習内容の補充・発展学習という形で各講座を展開する。〕

Aコース - 基本問題のドリル学習中心。

Bコース - 教科書(指導要領の内容)に関する問題及び発展教材についての演習。

Cコース - 教科書(指導要領の内容)の発展教材を中心。

【英語】〔1・2年の学習内容を中心に補充・発展学習という形で講座を展開する。〕

・2年 共通教材リスニング練習・単語プリント・確認テスト

A・Bコース - 1・2年の学習内容の復習。

Cコース - A L Tと共に指導にあたり、教科書から離れた話す・聞く・書く活動中心。

・3年 共通教材リスニング練習

Aコース - 1・2年の基礎的な文法・単語中心の復習。

Bコース - 1・2年の基礎的な文法・単語中心の復習、多読速読等読む力をつける演習。

Cコース - A L Tと共に指導にあたり、スピーキングを中心に実践力をつける演習。

3年では2教科以外に国語・理科・音楽・美術・体育・技術・家庭を選択教科として位置づけ、生徒の興味・関心に基づく選択によって1講座選択し、学習活動に主体的・創造的に取り組む態度や表現力を豊かにする学習の展開をしている。例えば、音楽では「しの笛」を竹を切るところから作り始め完成したしの笛の演奏を楽しんでいる。理科では、畑で作物を作り収穫を味

わったり、川・池の環境調査を行ったり環境教育を通して自分の生き方も考えさせる取り組みをしている。家庭科では、環境教育としてエコクッキングに取り組んでいる。

少人数教育の指導方法・指導体制の研究

【数学】

- 1年 - 中学教育第1段階ということで、選択履修方法は基本的には、教室の座席の前後で2グループに分けての少人数編成としたが、小単元「方程式の利用」では、習熟度別に個人選択で基本コースと応用コースに分かれる。習熟度別に分かれての学習内容は、基本的に同じ内容を指導したが、進度や練習問題の量、応用的な問題の量でコースの適性に合わせた指導を行うと共に、課題の点検を個別に指導するなど可能な限り個に応じた指導を行う。
- 2年 - 10月まで選択履修方法は、教室の座席の前後で2グループに分けての少人数編成としたが、単元「図形」から、習熟度別個人選択による基本コースと応用コースに分かれる。習熟度別に分かれての学習は、進度や練習問題の量、応用的な問題の量でコースの適性に合わせた指導を行う。
- 3年 - 教室の座席の前後で2グループに分けての少人数編成としたが、単元「三平方の定理」から、習熟度別個人選択による基本コースと応用コースに分かれる。習熟度別に分かれての学習内容は、基本的に同じ内容を指導したが、進度や練習問題の量、応用的な問題の量でコースの適性に合わせた指導を行う。

【英語】

- 1年 - 中学校教育第1段階ということで、TT指導の形で文法事項「一般動詞の疑問文とその答え方」の学習まで合同、その後、教室の座席の前後で2グループに分かれての少人数編成とする。指導の工夫として、教師作成のフラッシュカードの利用、毎時間ウォーミングアップとしてチャンク練習、家庭学習定着のための復習プリントや課題を行っている。また、個の習熟度の違いに応じる指導の1つとして、小テストでは基本問題とチャレンジ問題を出題。基本問題は基本文・必修語で採点対象とし、チャレンジ問題は自分の力に応じて挑戦するため採点対象ではないが点検をしほめ言葉を必ずコメントしている。
- 2年 - 各学期の始め1ヶ月は合同、その後習熟度別に個人選択で基礎コースと応用コースに分かれる。共通指導内容は、単語の課題とテスト、チャンク練習とし、指導方法はコースの適性に合わせる。
基本コース - 教科書の学習内容の指導と1年生の教科書利用のリーディング・シャドーイング・ディクテーションの活動を取り入れ読む・聞く力の向上に力を入れる。
応用コース - 教科書の内容をつかむQ & A、やや詳しい文法的な説明を加え応用力を高める指導を行う。
- 3年 - 各学期の始め1ヶ月は合同、その後習熟度別に個人選択で基礎コ

ースと応用コースに分かれる。指導方法はコースの適性に合わせる。進度調節の打ち合わせを綿密にし、学習内容・進度を同じにする。

基本コース - 文法の導入や練習のために学習プリントを使い、問題の難度に応じてヒントを与えている。

応用コース - 問題量を増やし、難易度の高い問題を加え応用力を高める指導を行う。

A L T が加わった指導は各学級週 1 回。1 年では少人数学級での指導とし、2・3 年では内容に応じて合同授業と少人数学級での指導と柔軟に対応している。

(3) 生徒が主体的に活動できる基盤を確かな物にしていく指導と工夫

学習習慣・規律づくりをすすめる

生活リズムづくりをすすめる

自分自身を認識し、受容でき、互いの違いを認め、助け合い、高め合う学級・学年集団づくりをすすめる。

総合的な学習の時間と必修・選択教科、道徳、特別活動を相互に関連づけながら、生徒が課題意識を持って活動するてだての工夫と実践。

(3) 研究体制



- ・教科部会は、単独教科別で研究を進めるほか 1 5 年度よりグループ別での研究協議を持ち、意見交流をはかる。グループは、国・数・英のグループ、社・理・技・家のグループ、音・美・体のグループとする。
- ・顧問として三重大森脇健夫先生に全体研修・教科部会・授業研究において指導を仰ぐ。

平成 1 4 年の成果及び課題

成果

朝の 1 0 分間学習

朝の 1 0 分、生徒はかなり集中して問題に取り組んでいる。また 1 時間目の学習を程良い緊張と共に始めることができる。1 0 分間といえども継続的なドリルができるため、授業とのつながりの中で基礎・基本の学習内容が定着しやすい。1 年生では、定期テストの結果を見ても全体的に学習結果はよく、極端に基礎・基本の定着が悪い生徒はほとんどいない。

選択学習

もう一度 1 年から学習したい、わからないことをわかりたいと思う生徒には、意

欲的に取り組める学習方法であった。また、習熟度別の内容が個の能力を活かす学習展開を可能にした。学年によっては、質問し合ったり、教え合ったりして主体的な学習活動もみられた。

少人数教育

少人数であるため、発言しやすい雰囲気、個々の発表の機会も増え、より授業に参加できた。また、生徒の疑問に一人ひとりていねいに応じることができ、生徒のつまづき箇所の把握がよりしやすかった。習熟度別の少人数編成では特に授業内容の展開がはかりやすく、1年数学において「方程式の利用」で基礎コースを選んだ生徒に前回の定期テストより20点以上得点を増やした者もいた。個々の生徒の学習意欲を高めることができた。

課題

コース決めやコース変更の際、友人関係等でコースを選ぶことのないように十分相談活動をする必要がある。

習熟度別学習を取り入れようとするとき、できる・できないという能力別学習と考える生徒もあり、個々がのびるための学習であることを生徒にも保護者にも理解を図っていかねばならない。

また、生徒自身が自分の力をみきわめ、自分でコースを選択できる力を高めるためのたて・指導體制づくりも重要である。

生徒の学習習熟状況・学習速度・学習スタイル・興味関心など実態を多面的に把握し、指導に当たる教師が共通理解を持つことが大切で、それにより、個に応じる教材・指導の工夫が具体的に進むと考える。また、単元・授業のねらいによっては、時間もより効果的な学習形態を選ぶことが必要になってくる。

少人数・習熟度別学習による授業は、授業内容、テストや評価の仕方を含め、教科の教師の連携が重要なかぎとなっている。しかし、打ち合わせの時間も確保できない場合が多く（特に非常勤講師の先生とも同じように共通理解が必要となる）、連携の仕方には多くの工夫が必要である。

・学力把握のための学校の取り組みについて

五教科についての学力診断テストを三月に実施し、学年が進むにつれて、それぞれの教科で学力がどのようについたのか診断する。

新入学生については、四月にも学力診断テストを行い入学前の学力の把握に努める。（平成15年度より予定）

学期2回の定期テストで4観点の視点からの問題提出を充実させ、学力の把握をすることで、少人数指導の学習集団編成における生徒側・教師側両方の資料とする。

・フロンティアスクールとしての成果の普及について

・研究会 日時 平成14年11月20日（水）

場所 東観中学校 全学年全学級

内容 国語・数学（習熟度別少人数）・英語（TT）・理科・音楽・人権

・今後成果と課題をHPによって公開